



Title	乳癌皮膚並に琳巴腺轉移のレ線治療に就て
Author(s)	貴家, 貞而
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1952, 12(7), p. 3-6
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/18545">https://hdl.handle.net/11094/18545</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 乳癌皮膚並に淋巴腺轉移のレ線治療に就て

東北大學醫學部放射線醫學教室(主任 古賀良彦教授)

貴 家 貞 而

(昭和27年2月10日受付)

## 内 容

### I 緒 言

### II 痘教室の治療術式

### III 治療成績

#### (i) 推計方法

#### (ii) I セリーの効果

#### (iii) II セリーの効果

#### (iv) 二次的再發とその治療效果

### IV 考 按

### I 緒 言

乳癌のレ線治療に關しては既に Seitz-Wintz, Kieler, Finci, Holfelder, Hintze, Pfahler, Lee, Schinz 等の報告があるが何れも遠隔成績に就てであつて個々の轉移巣に對する效果、即ちレ線放射に依る一次治癒に關する推計的考察は見當らない。余は手術せる乳癌に發生した轉移の中、特に皮膚並に淋巴腺轉移に對するレ線治療の效果を昭和17年5月より昭和22年8月迄の當科入院患者に就て調査したので之を報告する。

### II 痘教室の治療術式

先ず轉移瘤に就ての當教室の治療術式を述べる。轉移の有無に拘らず通常胸部の中央は健側胸骨線迄、外側は患側腋窩線迄、上方は鎖骨上窩部迄、下方は肋骨弓迄の領域を數放射野に分け此の中鎖骨上窩部及び腋窩部には深部治療を、その他は表在治療にて1回放射量250~300rを隔日毎に放射し、轉位の有無、大きさ、數などに應じ總量1500~3000rを放射して一系とする。轉移が之以外の部位にある時、豫防放射を行う時は適宜放射野を設定して前述と同様の放射を行う。各放射野を順次放射し終ればIセリーとし1~2カ月毎に來診させ、轉移の状況、二次的再發を監視し、尙治療を要するものはIIセリーを行う。

### III 治療成績

#### (i) 推計方法

此の報告に於ては昭和17年5月より昭和22年8月迄の當科入院患者の中皮膚又は淋巴腺轉移を證明し之にレ線治療を行つた36名に就て此の轉移が

第1表 放射野區分と經過判定

#### i) 放射野區分

轉移の種類	放射野番號	部 位
皮 膚	I	患側前胸部
	II	健側前胸部
	III	患側々胸部
	IV	背 部
	V	その他の皮膚轉移を起せし部
腺	VI	患側腋窩部
	VII	「鎖骨上窩部
	VIII	健側腋窩部
	IX	「鎖骨上窩部
	X	その他の腋轉移を起せし部

#### ii) 經過判定

略號	轉 移 の 經 過	判定
-	放射に依り轉移の消失せるもの	消失
+	著明に縮少せるもの	輕快
++	中等度に縮少せるもの	—
++	稍々縮少せるもの	—
++	放射するも轉移の不變のもの	未治
×	放射に依り輕快消失するも再び増大せるもの	—

放射に依て如何に變化したかをその大きさの變遷及び二次的再發の時間的消長の面より放射野毎に観察した結果に就て述べ生存期間其の他に就ては觸れぬ事にした。

皮膚轉移と淋巴腺轉移の區分は第1表の如く放射野I~Vに生じたものを皮膚轉移とし、VI~Xの部に生じたものを腺轉移とした。そのレ線治療の效果を轉移の消失及び縮少の程度に従い第1表の如く5段に分け、著明及び中等度に縮少したものを輕快、稍々縮少、不變及び増大を未治と判定した。観察期間は放射終了1週後より6カ月迄のものに及んだ。

#### (ii) I セリーの効果

皮膚及び腺轉移の治療経過は第2表の通りであ



## 臍 転 移(2)

症例	放射野番号	轉移の大きさ	轉移の數	放射量 r	放 射 終 了 後 の 經 過							
					1週	2週	3週	1カ月	2カ月	3カ月	4カ月	5カ月
25	VIII	小指一豌豆	2 數	1500	—	—	—	—	—	—	—	×
26	VII	米粒	1 數	2100	—	—	—	—	—	—	—	—
27	X	母指	1 數	2100	—	—	—	—	—	—	—	—
28	VII	小豌豆	1 數	1500	—	—	—	—	—	—	—	—
29	VII	豌豆	1 數	1800	—	—	—	—	—	—	—	—
30	VII	母指	1 數	2100	—	—	—	—	—	—	—	—
31	VII	母雞	1 數	3000	—	—	—	—	—	—	—	—
32	VII	小示	1 數	2400	—	—	—	—	—	—	—	—
33	VII	示小	1 數	3000	—	—	—	—	—	—	—	—
34	VII	鷄	1 數	3000	—	—	—	—	—	—	—	—
35	VII	豌豆	1 數	2400	—	—	—	—	—	—	—	—
36	VII	豌豆	1 數	1200	—	—	—	—	—	—	—	—
37	VII	豌豆	1 數	1200	—	—	—	—	—	—	—	—
38	VII	豌豆	1 數	2400	—	—	—	—	—	—	—	—
39	VII	豌豆	1 數	1800	—	—	—	—	—	—	—	—
40	VII	豌豆	1 數	2000	—	—	—	—	—	—	—	—
41	VII	手拳	1 數	1000	—	—	—	—	—	—	—	—
42	IX	指	1	1000	—	—	—	—	—	—	—	—

第3表 I セリーの效果

経過	1週後		1カ月後		3カ月後		6カ月後		總 例		
	轉移の種類	皮膚	臍	皮膚	臍	皮膚	臍	皮膚	臍	皮膚	臍
消失	失	5	6	6	7	4	5	4	2	19	20
軽快	快	5	7	6	13	3	7	0	3	—	—
未治	治	2	10	4	3	0	2	1	1	—	—
例	數	12	23	16	23	7	14	5	6	29	47

りその效果を總括して見ると第3表の如くなる。

即ち皮膚轉移は6カ月間の経過中に總放射野例29例中19例(65.5%)が消失して居り、その内訳を見ると放射終了1週後にはその時調べた12例中5例が消失し、1カ月後には16例中6例が、3カ月後には7例中4例が、6カ月後には5例中4例が夫々消失している。

一方淋巴腺轉移は6カ月間に總放射野例47例中20例(42.6%)が消失して居り、その内訳は放射終了1週後には23例中6例が消失し、1カ月後には23例中7例が、3カ月後には14例中5例が、6カ月後には6例中2例が夫々消失して居る。即ち皮

膚轉移の方が腺轉移より早期且つ顯著に消失に向うようである。

尙第3表に示す通り消失に迄至らない轉移も大多數が縮少、軽快して居り、又一旦消失した轉移か再び増大したものは皮膚及び腺轉移に各1例認められたに過ぎなかつた。

## iii) II セリーの效果

I セリー放射數カ月後轉移が縮少したが尙消失迄至らなかつたもの、及び再び増大した前記2例にII セリーを行つた。此は4名、放射野5例中皮膚轉移1例、腺轉移4例であつて、その治療效果を調べると第4表の如くなる。

第4表 II セリーの效果

症例	轉移の種類	放射野番号	轉移の大きさ	轉移の數	I セリーの放射量 r	I セリーの效果	放射休止期間	II セリーの放射量 r	II セリーの效果
5	皮膚	I	示	1	1800	×	6	3000	3カ月後消失
26	腺	VII	米粒	數	2100	×	4	2400	2週後消失
20	腺	VI	小豌豆	1	1500	+	3	1000	2カ月後消失
29	腺	VII	豌豆	3	1500	+	3	1000	2週後消失
		VII	鷄	1	3000	+	5	3500	1週後消失

即ち全例に於て II セリー終了 1 週乃至 3 カ月後に轉移が消失しその效果が認められ、皮膚及び腺轉移間に效果の差を認める事が出來なかつた。

第5表 二次的再發とその治療效果

症例	轉移の種類	再發部位	その部位に既往に放射の有無	I セリー後再發迄の期間月	再發巢の大さ	再發巢の数	放射量 r	效果
7 13 18 〃 25	皮膚 〃 〃 〃 〃	V I IV V II	— — — — —	1 5 3 3 1	小指一豌豆 豌豆 豌豆 豌豆 豌豆 小指	數 1 數 2 1	2100 2700 1500 1500 1500	1週後消失 2カ月後消失 2カ月後消失 2カ月後消失 1カ月後消失
7 8 11 12 20 〃 25 〃 〃 26 31	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 腺 〃 〃	V V V V V V V V IX VIII VII	— — — — — — — — — — —	2 1 7 2 4 4 7 7 3 6 3	米粒 米粒 米粒 米粒 豌豆 豌豆 豌豆 豌豆 小指 小指 鷄胡	數 3 數 3 2 數 數 數 1 1 1 1		

再發部位は16例でその中皮膚轉移が13例、腺轉移が3例である。之等は何れも以前に放射を行わなかつた所であつて I セリーで放射した部位には再發を起して居らない。此の中4名(放射野は5例で何れも皮膚轉移である。)に前記と同様なレ線治療を行い、全例に於て放射終了 1 週乃至 2 カ月後に再發瘤が消失して居る。即ち二次的再發は以前に放射した部位に起らず、放射しなかつた部位にのみ現れ、そのレ線治療は全例に於て效果が認められた。此の效果に皮膚及び腺轉移間に差があるか否かは後者の治療例がない爲不明である。

## IV 考 按

## iv) 二次的再發とその治療效果

次に轉移の治療中に二次的に皮膚又は淋巴腺に再發を起した10名に就て調べると第5表の如く

以上述べた事實より余は次の如き可能性に就て根據が得られたと思う。

- 手術した乳癌の皮膚並に淋巴腺轉移に對してレ線治療は卓效を呈する。
- 此の際皮膚轉移の方が腺轉移よりも早期且つ顯著に奏效するようと思われる。
- I セリーで尚消失しない轉移及び二次的に生じた再發瘤にもレ線治療は有效である。
- I セリーで消失した轉移の再發を見ることは少なく且つ以前に豫防放射した部位には數カ月の観察では1例も再發を見ない。